
聖廻の果て

琥珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖廻の果て

【Nコード】

N9588Y

【作者名】

琥珀

【あらすじ】

ある日を境に…

俺の人生が変わった…。

剣 暁

- 中学2年の冬 -

俺、けんがしめかつき剣暁の隣には、

幼馴染みの夢靨むあひひとみ晴

春に転入してきたダチの盾魔烈じゅんまれつ

がいた。

登校から下校まで毎日ずっと一緒にいた。

くだらないこと言い合ったり、どうでもいいようなことで盛り上がったり、

とりあえず毎日が充実していた。

でもある日…

そんな毎日からかけ離れた生活が始まろうとしていた。

まだ寒くて、まだ真っ白な世界の

1月27日のことだった。

盾魔 烈

- 中学2年となっていた冬 -

あんなに仲良くなれる人間がいると思っていなかった。

少し…別れるのが寂しい…か？

私がこんなこと思うなんて
許されることではないか。

以前の生活に戻るだけだ。
ただ少しの違いがあるだけ

今夜、私は？本当の私？に戻る。

しばらく触れていなかった、
人間たちが見たら気味悪がるような
血で染められたような色をしたこの首飾^{ペンダント}…。

静かに手に取り

首元にもっていく…

1月27日…。

向いっつはどんな季節だろう。

夢 晴

- 中学2年の冬 -

吐く息が真つ白な朝、
制服に着替えながら机に置いてあるカレンダーに目を向ける。

1月27日…。

明日は暁の誕生日だ!!

久々に腕がなる

以前からこの日のために烈と2人で作戦を練ってきたサプライズ。
それを決行する日がついにやってきた!

明日のためにも烈と最後の打ち合わせしなくちゃ!!

そう思って家を出たのに…

いくら待っても2人は
いつもの集合場所に来なかった。

学校にも…

行きつけのお店にも

二度と現れなかった。

- 1 - (前書き)

本編スタートです。
視点は暁です。

1月27日…。

窓の外では漆黒の夜空に純白の雪が降り続けている。

5年前の今日も、
同じような寒空の天気だった。

そう思いながら1人で床に座る。
俺の目の前には
母親の真波まなみと弟の遊ゆうの笑顔の写真がある。

チ…チ…チ…チ…

ただ黙って時計を見続ける。

- 午後 8 時 4 8 分 -

2 人の死が確認された時間…

手を合わせ目を瞑る…

その時… ガタン…!!

と窓から音がした…

慌てて振り返ると

深い緑色の瞳をした冷徹な表情の人物が立っていた…

一瞬の出来事だった。

緑色の瞳から目が離せなくて身動きが取れなくなった

震えている俺の体は真っ黒な左腕に抱えられ窓から飛び出した。

黒くて大きな翼が俺の視界全体に広がる

翼が上下する度に見える冷徹な表情。

ぞっとするけど…

男の俺でも思うほど綺麗な顔立ち。

そっち系の趣味はないけど、純粹にそう思った。

どこか見たことあるような気がする横顔…

あ…まさか…！！

そう思って少し体に力が入った。

すると黒い手が俺の首辺りにきて

何かが刺さったような

- ゲスッ -

という音と同時に

全身の力が抜けていって意識が薄れていった。

「ん…。」

目が覚めて回りを見渡す。

俺の視界に入るのは木造の天井と、棚いっぱいにしまわれた本だけだった。

背表紙に書いてあるのは記号のようで俺には読めなかった。

「ここはどこだ？」

どろどろしてこんなところか…？

とりあえずここから出よう。

そう思って立ち上がりドアを探す…

「へ…？」

俺がいる部屋のドアには、ドアノブがない…

ダンッ！！

押してもびくともしない。

「どーゆーことだよ…。オイ！！誰か！！このドア開けてくれよ！」

なんどもドアを叩き、人が居るかもわからないドアの向こう側にむかって叫ぶ。

ガチャ…

意外と早く開いたドア…

「うるさいぞ。静かにしろ。」

そして冷たい声で吐かれた台詞^{セリフ}

顔をあげると、

1人の男が立っていた。

綺麗な顔立ちをしていて、少し見とれてしまった…

しかし、瞬きをして正気に戻る。

こいつは男だ。男の俺が見とれてどうする。

そうして動揺を隠すようにその男に低い声で話しかけた。

「ここはどこだよ…。」

「答える必要はない。」

「なんでだよ!」

「後で詳しく話されるだろう。お前名前は？呼び方が分からないと会話もろくに進まないだろう。」

「俺は…。俺の…名前は…?」

鼓動が激しくなっているのが自分にもわかる。

俺の名前はなんだ？

「自分の…名前が分からないのか？

私はガレス・ド・ディアボロス。ガレスと呼べ。」

「……」

状況が飲み込めなくて言葉が出ない。

「おい」

「……」

「上でじいちゃんがお前を待ってる。」

「……？」

「話したいことがあるらしい」

お前自信が疑問に思っていることにも答えてくれるだろう。」

そう言つて…ガレスという男はドアを開けたまま部屋から出て行つた。

なんで…俺は俺の名前がわからないんだ…？

今までの記憶を辿ろうとしても俺が立っている位置からはいくら振り返つても道がない。

上にあがつて行けば…理由が分かるかもしれない…。

俺は拳を強く握りしめ

立ち上がつて部屋をあとにした。

階段を登つてドアを開ける。

薄暗い部屋にいたせいか、眩しくて目の奥が痛い。

それでも俺は目を瞑らないで部屋の中に居る人物から視線をそらさなかつた。

光のせいで顔が見えないけど、シルエット的には老人が1人とさつ

きの奴がいる。

「よく来たな…。と言うのは失礼かの。もう少しこっちへ寄りなさい。」

そう言って手招きされた俺は言われた通り一歩ずつ近づいていった。

「私はガヘリス・ド・ディアポロス。ガレスの祖父だ。少し話が見たいんだが…。」

まだ…気持ちは落ち着かんだろ。なにか、聞きたいことはあるか？出来る限り答えようとは思うんじゃないか。」

そう言って不安を掻き出すように笑ってくれた。

その笑顔を見たとなん…

必死に繋いでた糸が切れたみたいに固く握っていた掌てのひらから力が抜けて

目から涙が溢れて止まらなかった。

俺が今いるこの世界は

『ローグレンツ』

現在地は イーストタウン。

この店は コーパス・ブライド と言っらしい。

俺の質問に、ガヘリスさんはゆっくり正確に説明してくれた。

「俺は…どうしてここだ？」

「すまんが、それはわしらにもわからん。

ガレスがこの店の裏で、君が倒れているのを見つけたんじゃないよ」

「倒れて…」

口を閉じて深く息をする…。
だめだ。

思う出そうとすればするだけ、胸が苦しくなって辛い…。
そして一瞬、頭に激痛が走って、そこから意識がなくなった。

「やはり…体力がもたなかったようじゃの…。」

「ああ。あの世界から来たんだ。空気も気圧も全く違うから。
3時間で目が覚めて、2時間も起きていただけですごいよ。2階に
…連れて行ってくる。」

俺が目を覚ましたのは…あの話をした日から5日後のことだった。目は覚めたのに、ベッドから起き上がれる気がなくて窓の外にある大きな木を見ていた。

ガチャ…

ドアが開いて誰が入ってきた。振り返ってみると、そこにはガレスさんが立っていた。

「起きたのか…、気分はどうだ？」

「良くは…ないです。起き上がれる気がしなくて。

どれだけ考えても、自分は何処に居たのかとか、何で倒れていたのかとか、

名前すらも分からなくて…。」

「これから思いだしていけばいいだろう。」

「でも、君やガヘリスさんに迷惑をかけるわけには…」

「誰が迷惑だなんて言った？」

そう言われて顔を上げた。

「私は迷惑だなんて思っていない。じいちゃんもきつとそつだ。起きれそうになったら下へ来い。話の続きがしたいらしい。」

「……………」

そう言つてガレスさんはドアを閉めて タンタン と音を立てながら階段をおりて行つた。

- 行かなきゃ -

そう思つても体が動かなくてしばらく起き上がれなかった。

ゴォーン、ゴォーン、ゴォーン、 部屋にある大きな古い時計の鐘が鳴りだした。

見たら12時を指している。 そろそろまずいな…。

そう思つて体に思いつきり力を入れて起き上がった。

タン、タン、タン、、、

階段をゆっくり踏みながら下へおりて行くと、2人の視線が俺に向けられた。

「あの…。長い間寝てしまっすすみませんでした。

この間の話の続きを聞かせてもらってもいいですか？」

少し控えめになって聞いてみると、

「ああ、良いじゃろう。こっち来て、ここに掛けなさい。」

そう言っ手招きをされた

言われるがまま、2人に近づき1人用のソファに座った。

「この前は、どこまで話したかのう…」

「俺が、この店の裏で倒れていた といつところまでです。」

「おおそうじゃったか。そう、君は倒れていたんじゃ。

雨の中、薄い衣服1枚の姿での。その時に、君の手にはこれがあったんじゃが…」

そういつてガヘリスさんが差し出してきたのは、

一冊の古いノートだった。

「悪いが勝手に開いてしまったよ。

じゃが、何も書いていない真っ白なノートじゃった。」

そう言われて開いてみたが、本当に何も書いていなかった。

表紙には ・ 選ばれし者よ ・ と書かれていた。

このノートは本当に俺のものなのか…？
そう思つて表紙をめくりほんの小さな書き込みがないか確かめようとした。
すると、表紙の裏に薄く小さい文字で文章が書いてあるのを見つけた。

『 - 手放すことを許されぬ汝は
身近な者を頼り前に進み続けよ - 』

書いてある文章を声に出して読み上げたら、部屋全体に光が放たれた。

しばらくしてから目を開き、ガヘリスさんとガレスさんの方を見る…。
そして再びノートに視線を落とすといつのまにか、

白紙だった1ページめに

3行の文章が綴られていた…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9588y/>

聖廻の果て

2012年1月2日00時47分発行